

30年を迎えて

齋 藤 高 弘

第1巻1号の学会記事欄には、昭和48年10月21日準備委員長渡辺富士夫教授、学会会長村瀬正雄教授の下に学会創立総会および記念講演会が無垢記念講堂で開催され、記念パーティーには本学教員ならびに歯科医師会会員など多数参加し、また、歯科関連の業者約20社が20、21日に展示会が開催されたと記されている。

昭和49年12月25日東北歯科大学学会誌第1巻1号（創刊号）が発刊され、第30巻1号（通算）奥羽大学歯学誌で30年目を迎える。

第1巻1号の折り込みには、村瀬正雄会長が「発刊に際して」という題で、

“「人の一生は重き荷を背負いて、はるかなる幸ある里を求め、遠き遠き旅に立つに似たり。あらゆる困難と孤独を克服し、努力してはじめて至る」と。

この意味の名言を時の日本を代表する学者藤田 彪が記していると伝えられている。後世の人はこの道を辿り、始めて彼の偉大さを知り、後の世にこの言葉を光として伝えている。

大学学会とは教授から学生に至るまでが共にこの道を辿り、やがて栄光ある東北の光にしなければならないと思う。

東北歯科大学学会の発展を祈りて記す。”（原文のまま記載）と述べられている。

第1巻1号の1頁には、総説「歯周疾患における免疫学傷害について」と題して奥村晴一、新田敏正氏が投稿している。

30年の歳月は、定年という形で研究生活を終えた先生、現在学部を中心として活躍している先生、当時学生だった人たちが大学の中堅として現場で頑張っている先生など、脈々と一本の川のごとく流れている。

30年という歳月は、夢物語であった遺伝子の解明とその応用に至るまで発展し、21世紀は脳の生理的な面を解明して精神構造へメスを入れようとしている。

一方、歯学教育に目を転じると、「国際社会で通用する歯科医師の養成」、「患者本位の歯科医学・医療」など歯科医師の技術ならびにひとりの人間としての資質を高めるための教育が求められ、臨床実習前までに全国共通のカリキュラムが設定・履修され、全国共通の試験を実施することが決定している。また、近い将来歯科医師国家試験にも実地試験が復活することが予想されている。

また、学校教育法では一部改正がなされ、大学院の現行の目的が、研究者養成を主とした大学院であった。しかし、専門職養成の大学院にあっては、高度専門職業人の養成のための大学院が創設され、目的として高度専門職業人の養成を明確にするとともに、

大学院のうち高度専門職業人の養成を目的とするものは、専門職大学院とすることが予定されている。その際、教育研究等に関して自ら点検および評価を行い、公表し、第三者機関の評価を受けなければならない。

このように大学を取り巻く環境は、劇的な変化にさらされ、一つでも欠かすことができない重要なことで、着実に実施しなければならないことであり、現在本歯学部でも大改革が進行中である。

我々の目前にある「重き荷を背負いて、はるかなる幸ある里を求め」、先人が脈々と築いた業績を大地に吸い込まれることなく、後人に託して一步一步進むことが必要であり、そのためにも今の難局を打開しなければならない。

(奥羽大学歯学部診療科学講座 主任教授)